

# 山吹

泉鏡花

青空文庫



## 序

山吹の花の、わけて白く咲きたる、小雨の葉の色も、ゆあみしたる美しき女の、  
眉あおき風情に似ずやとて、――

時 現代。

所 修善寺温泉の裏路。

同、下田街道へ捷徑の山中。

人 島津正（四十五六）洋画家。

縫子（二十五）小糸川子爵夫人、もと料理屋「ゆかり」の娘。

辺栗藤次（六十九）門附の人形使。

ねりものの稚児。童男、童女二人。よろず屋の亭主。馬士一人。

ほかに村の人々、十四五人。

候 四月下旬のはじめ、午後。――



## 第一場

場面。一方八重の遅桜、三本ばかり咲満ちたる中に、よろず屋の店見ゆ。鎖したる硝子戸に、綿、紙、反もの類。生椎茸あり。起癩散、清暑水など、いろいろに認む。一枚戸を開きたる土間に、卓子椅子を置く。ビール、サイダアの罎を並べ、菰かぶり一樽、焼酎の瓶見ゆ。この店の傍すぐに田圃。

一方、杉の生垣を長く、下、石垣にして、その根を小流走る。石垣にサフランの花咲き、雑草生ゆ。垣の内、新緑にして柳一本、道を覗きて枝垂る。背景勝手に、紫の木蓮あるもよし。よろず屋の店と、生垣との間、逕をあまして、あとすべて未だ耕さざる水田一面、水草を敷く。紫雲英の花あちこち、菜の花こぼれ咲く。逕をめぐり垣に添いて、次第に奥深き処、孟宗の竹藪と、槻の大樹あり。この蔭より山道をのぼる。

狭き土間、貧しき卓子に向つて腰掛けたる人形使——辺栗藤次、鼻の下を横撫をしながら言う。うしろ向のままなり。

人形使 お旦那——お旦那——もう一杯注いで下せえ。

万屋 (店の硝子戸の内より土間に出づ) 何もね、旦那に(お)の字には及ばないが、

(苦笑して) 親仁、先刻から大分明けたではないか。……そう飲んじやあ稼げまいがな

あ。

人形使 へ、へ、もう今日は稼いだ後だよ。お旦那の前だが、これから先は山道を晴へ帰るばかりだでね——ふらりふらりとよ。

万屋 親仁の、そのふらりふらりは、聞くまでもないのだがね、疇にはまだ刻限が早かるうが。——私も今日は、こうして一人で留守番だが、湯治場の橋一つ越したこっちは、

この通り、ひっそり閑で、人通りのないくらい、修善寺は大した人出だ。親仁はこれからが稼ぎ時ではないのかい。

人形使 されば、この土地の人たちははじめ、諸国から入込んだ講中がな、媼、媪々、爺、孫、真黒で、とんとはや護摩の煙が渦を巻いているような騒ぎだ。——この、時

々ばらばらと来る梅雨模様雨にもめげねえ群集だでね。相当の稼ぎはあつただが、もうやがて、大師様が奥の院から修禅寺へお下りだ。——遠くの方で、ドーンドーンと、御輿の太鼓の音が聞えては、誰もこちとらに構い手はねえよ。庵を上げた見世物の、じ

や、じゃん、じゃんも、音を潜めただからね——橋をこつちへ、はい、あばよと、……

ははは、——晩景から、また一稼ぎ、みつちりと稼げるだが、今日の飲代にさえあり

つけば、この上の欲はねえ。——罷り違つたにした処で、往生寂滅をするばかり。(ぐ

つたりと叩頭して、頭の上へ硝子杯を突出す)——お旦那、もう一杯、注いで下せえ。

万屋 船幽霊が、柄杓を貸せといった手つきだな。——底ぬけと云うは、これからは

じまつた事かも知れない。……商売だからいくらでも売りはするが。(呑口を捻る)

——親仁、またそこらへ打倒れては不可いよ。

人形使 往生寂滅をするばかり。(がぶりと呑んで掌をチユウと吸う)別して今日は御命

日だ——弘法様が速に金ぴかものの自動車へ、相乗にお引取り下されますてね。

万屋 弘法様がお引取り下さるなら世話はないがね、村役場のお手数になつては大変だ。

ほどにしておきなさいよ。(店の内に入らんとす。)

人形使 (大な声して)お旦那、もう一杯下せえ。

万屋 弘法様の御祭だ。芋が石になつては困る。……もの惜みをするようで可厭だから、

ままよ、いくらでも飲みなさい。だが、いまの一合たつぷりを、もう一息にやったのか

い。

人形使 これまででは雪見酒だで、五合一寸たちまちに消えるだよ。……これからお花見酒だ。……お旦那、軒の八重桜は、三本揃って、……樹は若えがよく咲きました。満開だ。——一軒の門にこのくらい咲いた家は修善寺中に見当らねえだよ。——これを視めるのは無銭だ。酒は高価え、いや、しかし、見事だ。ああ、うめえ。

万屋 くだらない事を言いなさるな、酔つたな、親仁。……

人形使 これというも、酒の一杯や二杯ぐれえ、時たま肥料にお施しなされるで、弘法様の御利益だ。

万屋 詰らない世辞を言いなさんな。——全くこの辺、人通りのないのはひどい。……先刻、山越に立野から出るお稚児を二人、大勢で守立てて通つたきり、馬士も見掛けない。——留守は退屈だ——ああ太鼓が聞える。……

この太鼓は、棒にて荷いつりかけたるを、左右より、二人して両面をかわるがわる打つ音なり、ドーン、ドーンドーン、ドーンと幽に響く。

人形使 笙筆、篳篥が、紋着袴だ。——消防夫が揃って警護で、お稚児がついての。あとききの坊様は、香を焚かつしやる、御経を読まつしやる。御輿昇ぎは奥の院十八軒の若い衆が水干烏帽子だ。——南無大師、遍照金剛ツ！ 道の左右は人間の黒山だ。

お捻ひねりの雨が降る。……村の嫁女は振袖で拜みに出る。独鈷とっこの湯からは婆ばあさま様が裸はだか体で飛出す——あははは、やれさせてこれが反あへこへ対なら、弘法様は嬉しかんべい。

万屋 勝手にしろ、罰の当った。(店へ入る。)

人形使 南無大師遍照金剛。——(ちびりとのみつつ、ぐたりとなる。)

夫人、雨傘をすぼめ、柄を片手に提てさげげ、手提てさげを持添う。櫛くしまき巻、引ひっかけ帯、駒下駄こまげたに出て出づ。その遅桜を視ながめ、

夫人 まあ、綺麗きれいなこと——苦勞をして、よく、こんなに——(間)……お礼を言いたいようだよ——ああ、ほんとうに綺麗だよ。よく、お咲きなこと。(かくて、小流こながれに添いつつ行く。石がきにサフランの花を見つつ心付く)あら鯉こいが、大な鯉おおきが、——(小流を覗のぞく) まあ、死んでるんだよ。

やや長き間。——衝つと避けて、立離るる時、その石垣に立掛けたる人形つかいの傀にんぎ儡よう目に留る。あやつりの竹の先に、白拍子しらびようしの舞の姿、美しく臍へうたけたり。夫人熟じつと視みて立たちどま停る。無言。雨の音。

ああ、降つて来た。(井菊と大きくしるしたる番傘を開く) まあ、人形が泣くように、目にも睫毛まつげにも雫しずくがかかつてさ。……(傘を人形にかざして庇かばう。)

人形使

(みじかのれん短き暖簾を頭にて分け、口大く、しわ皺深く、眉迫り、ごま塩髯硬く、真赤に酔

いしれたる面を出し、夫人のその姿をじろりと視る。はじめ投頭巾を被りたる間、お

もて柔和なり。いま頭巾を脱いだる四角な額に、白髪長くすくすくとして面凄じ。)

画家

(なかおれぼう薄色の中折帽、うすき外套を着たり。細面にして清く瘦す。半ば眠れる

がごとき目ざし、通りたる鼻下に白き毛の少し交りたる髭をきれいに揃えて短く摘む。

おもての色やや沈み、温和にして、しかも威容あり。旅館の貸下駄にて、雨に懸念せず、

ステッキを静につき、一度桜を見る。)

人形使

(この時また土間の卓子にむかつてうつむく。)

画家

(夫人の身近に、何等の介意なき態度) ははあ、操りですな。

夫人

先生——ですか、あの、これは私のじゃあございませぬの。

画家

(はじめて心付きたる状にて) どうも、これは失礼しました。いや、端から貴女が

なさると思つた次第でもありません。ちよつと今時珍しかったものですから。——近頃

は東京では、場末の縁日にも余り見掛けなくなりました。……これは静でしような。裏

を返すと弁慶が大長刀を持って威張つている。……その弁慶が、もう一つ変ると、赤

い願巻をしめた鮓になつて、踊を踊るのですが、これには別に、そうした仕掛も、か

らくりもないようです。——（覗き覗き、<sup>すま</sup>済して夫人のさしかざしたる番傘の中へ半身）  
純、これは舞姫ばかりらしい。ああ、人形は名作だ。——御覧なさい<sup>すこ</sup>凄（すこ）いようです。：

：誰が持っていますか。……どうして、こんな処へほうり出しておきますかね。

夫人 人形つかいは——あすこで、（軽く指し、<sup>ゆびさ</sup>声を低くす）お酒を飲んでいるよう  
の。……そうらしいお爺さんが見えました。

画家 うまいでしょうな、きつと……一つ使わせてみとうございますね。

夫人 およしなさいまし、先生。……たいそう酔っているようですから。

画家 いかにも、酔つ払つていては面倒ですね。ああ、しかし、人形は名作です——<sup>かえり</sup>帰途

にまた出逢うかも知れない。（半ば<sup>つぶや</sup>眩く）貴女、失礼をいたしました。（冷然として山

道<sup>かた</sup>の方へ行く。）

夫人 （二三歩あとに<sup>すが</sup>継る）先生、あの……先生——どちらへ？

画家 （再びはじめて心付く）いや、（と軽く言う。間）……先生は弱りました。が、町

も村も大変な雑<sup>ざつと</sup>鬧ですから、その山の方へ行ってみます。——貴女は、（おなじく眠  
れるがごとき目のまま）つい、お見それ申しましたが、おなじ宿にでもおいでなのです  
か。

夫人 ええ、じき（お傍そばにと言う意味籠こもる）……ですが、階下したの奥に。あの……

画家 それはどうも——失礼します。（また行く。）

夫人 （一歩おとこしゆ縫る）先生、あのここへいらつしやりがけに、もしか、井菊の印半纏しるしばんてんを着た男衆おとこしゆにお逢いなさりはしませんでしたか。

画家 ああ、逢いました。

夫人 何とも申しはいたしません？……

画家 （徐おもむろに腕を拱こまぬく）さあ……あの菊屋と野田屋へ向つて渡る渡月橋とぎつきようとか云うのを渡

りますと、欄干らんかんに、長い棹さおに、蓑みのを掛けたのが立ててあります。——この大師おうちの市いちには、

盛さかんに蓑みのを売るようです。その看板かんばんだが、案山子あかしのぼりの幟ぼりに挙げたようでおかしい、と思つて、

ぼんやり。——もつとも私も案山子あかしのぼりに似てはいますが、（微笑ほほえむ）一枚、買いたいけれ

ども、荷にになると思つて見ていますと、成程、宿の男が通りかかりました。

夫人 ええ、そうして……

画家 ああそうです。（拱こまぬきたる腕を解く）……「そこに奥さまがおいでです。」と言つて行き過ぎました。成程……貴女の事でしたか。お連つれになつて一所に出掛けたとも思つたでしょう——失礼します。

夫人 まあ、先生。……唯<sup>ただいま</sup>今は別々でしたけれど、昨夜おそく着きました時は、御一所  
でございましたわ。

画家 貴女と……

夫人 ええ。

画家 存じませんな。

夫人 <sup>おおひと</sup>大仁で。……自動車はつい別になりましたんですが、……おなじ時に、――

画家 私は乗合でしたかな――さよう……お<sup>ひとかた</sup>一方、仕立てた方があったように思います  
が、それは、至極当世風の髪も七三で……（と半ば言う。）

夫人 その女が……（やや息<sup>いきぜわ</sup>忙しく）その女が、先生、宿へ着きますと、すぐ、あの、  
<sup>まみえ</sup>眉毛を落しましたの。（顔を上げつつ、<sup>さつ</sup>颯とはなじろむ）髪もこんなにぐるぐる巻にし  
たんです。

画家 ははあ。（いぶかしそうに、しかし冷静に聞くのみ。）

夫人 先生。（番傘を横に、うなだれて、さしうつつむく。頸<sup>えりあし</sup>脚雪を欺<sup>あざむ</sup>く）宿の男衆が申  
したのは、余所<sup>よそ</sup>の女房という意味ではないのです。（やや興奮しつつ）貴方<sup>あなた</sup>の奥さまと  
いう意味でございました。

## 間

画家（かくても、もの静しずかに）……と仰おっしゃ有ると？

夫人 昨晚、同じ宿へ着きますと、直ぐ、宿の人に——私は島津先生の——あの私は……

（口籠くちごもる。小間すこしきま）お写真や、展覧会で、蔭ながらよく貴方を存じております。——

——「私は島津の家内ですが」と宿の人に——「実は見付からないようにおなじ汽車で、あとをつけて来たんです。」辻棲つじつまはちつと合あわないかも存じませんが、そう云いましたの。……その次第わけは「島津は近頃浮気をして、余所よその婦おんなと、ここで逢あひひきびきをするらしい」……

画家 私か。

夫人 貴方が、あの、そして、仮に私の旦那様が。

画家 それは少々怪けしかりません。（苦笑する。）

夫人 堪忍かにして下さいまし。先生、——「座敷を別に、ここに忍んで、その浮気を見張るんだけれど、廊下などで不意に見附かつては不可いけないから、容子ようすを変えらるんだ。」とそう言つて、……いきなり鏡台で、眉を落して、髪も解いて、羽織を脱いでほうり出して、帯もこんなに（なよやかに、頭つむりを振向く）あの、蓮葉はすはにしめて、「後生ごしょう、内証だよ。」

と堅く口止くちどめをしました上で、宿帳のお名のすぐあとへ……あの、申訳はありませんが、おなじくと……

画家 (微かすかに眉ひそを顰ひそむ。しかし寛容に) 保養に来る場所ところですから、そんな悪戯いたすらもいいでしような——失礼します。

夫人 あれ、先生、お怒りも遊ばさないで……

画家 綺麗な奥さんに悪戯いたすらをされて——かえつて喜んでいるかも知れません。——しかし失礼します。

夫人 どうしましょう、先生、私……悪戯いたすらどころではありません。

画家 悪戯いたすらどころでないというは？ (この時はじめて確しかと言う。)

夫人 (激して、やや震えながら) 後生ごせいです。見て下さいまし。貴方あなたに見て頂きたいものがあるんです。(外套がいとうの袖そでを引く、籠こもれる力ちからに、画家えいを小流こながれの縁ふちに引戻ひきかえす) ちよつと御覧ごらんなさいまし。

鯉こいを指ゆびさす、死したる鯉こい、この時ときいまだ客者かくしやの目めにつかず。

画家 おお、これは酷ひどい。——これは悲惨ひつぱんだ。

夫人 先生、私は、ここに死んで流れています、この鯉こいの、ほんの死際しにぎわ、一息前と同じ

身の上でございます。

画家（無言。……）

夫人（間）私には厳しく追手が掛つております。見附かりますと、いまにも捉えられなければなりませんのですから。——途中でお姿をお見上げ申し、お宿まで慕つて参つて、急の思いつきで、失礼な事をいたしました。一生懸命なのです。そしてちよつとの間に、覚悟をしますつもりでおります。——眉を落して、形をかえて、貴方の奥さまになつて隠れていまして、人出入の激しい旅館では、ちつとも心が落着きませんから、こうして道に迷つております。どうぞ、御堪忍なすつて下さいまし。……夢にも悪戯ではないのですから。

画家 いたし方がありますまいな。

夫人（もの足りなさに、本意なげにて）無理にもお許し下さいましたか。……その上なお言葉に甘えますようですね、お散歩の方へ……たとい後へ離れましても、御一所に願えますと、立派に人目が忍べます。——貴方（弱く媚びて）どうぞ、お連れ下さいましな。

画家（きつぱりと）それは迷惑です。

夫人 まあ。——いいえ、お連れ下さいますしても、その間に、ただ（更に鯉を指す）この姿になります覚悟を極めますだけなんでございますもの。

画家 それは不可いけませんな。御事情はどんなであろうと、この形になつては仕方ありません。

人形使 （つんのめりたるが猛然と面を擡おもてげ）お旦那、もう一杯下せえ。お旦那。

画家 （この声を聞く。あえて心に留めず）私いちにん人としてはこんな姿におなりなさるのだけは堅くお止め申します——失礼をします。（衝つと離れて山手に赴く。）

夫人 （画家の姿、櫂けやきの樹立こたちにかくれたる時、はらはらとあとを追い、また後戻りす。見送りつつ）はかないねえ！

わが声に、思わず四辺あたりを視る。降らぬ雨に傘を開き、身を恥じてかくすがごとくにして、悄しやうぜん然と、画家と同じ道、おなじ樹立に姿を消す。

人形使 お旦那、もう一杯下せえ。

万屋 ちよツ、困らせるじゃあないか。（ついで与う。）

人形使 そのかわり、へ、へ、今度はまた月見酒だよ。雲がかかると満月がたちまちかくれる。（一息に煽あお切る）ああッ、う——い。……御勘定……（首にかけた汚きたき大蝦蟇おおがま

口より、だらしく紐を引いてぶら下りたる財布を絞り突銭する。弘法様も月もだがよ。銭も遍く金剛を照すだね。えい。（と立つ。脊高き瘦脛、破股引にて、よたよた。酒屋は委細構わず、さつさと片づけて店へ引込む。）えい。（よたよた。やがて人形の前までよたよたよた）はッ、静御前様。（急に恐入つたる体にて、ほとんど土下座をするばかり。間。醉眼を鯉に見向く）やあ、兄弟、浮かばずにまだ居たな。獺が銜えたか、鼬が噛つたか知らねえが、わんぐりと歯形が残つて、蛆がついては堪らねえ。先刻も見ていりや、野良犬が嗅いで嗅放しで失せおつた。犬も食わねえとはこの事だ。おのれ竜にもなる奴が、前世の業か、死恥を曝すは不便だ。——俺が葬つてやるべえ。だが、蛇塚、猫塚、狐塚よ。塚といええ、これ突流すではあんめえ。土に埋めるだな、土葬にしべえ。（半ばくされたる鯉の、肥えて大なるを水より引上ぐ。客者に見ゆ）引導の文句は知らねえ。怨恨あるものには祟れ、化けて出て、木戸銭を、うんと取れ、喝！（財布と一所に懐中に捻じ込みたる頭巾に包み、腰に下げ、改つて蹲る）はッ、静御前様。（咽喉に巻いたる古手拭を伸して、覆面す——さながら猿轡のごとくおのが口をば結う。この心は、美女に対して、熟柿臭きを憚るなり。人形の竹を高く引かつぐ。山手の方へ）えい。（よたよた。よたよたよた。）

夫人、樹立の蔭より、半ば出でてこの体を窺いつつあり。

人形使 えい。(よたよた) えい。(よたよたよた。)

夫人 (次第に立出で、あとへ引かえしぎまにすれ違う。なおその人形使を凝視しつつ)  
 爺さん、爺さん。

人形使 (丈高く、赤き面にて、じろりと不気味に見向く。魔のごとし。)

夫人 (大胆に、身近く寄る) 私は何にも世の中に願はなし、何の望みも叶わなかったから、お前さんの望を叶えて上げよう。宝石も沢山ある。お金も持っています——失礼だけれど、お前さんの望むこと一つだけなら、きつと叶えて上げようと思うんだよ。望んでおくれな。爺さん、叶えさしておくんなさいな。

人形使 (無言のまま睨むがごとく見詰めつつ、しばらくして、路傍に朽ちし稲塚の下の古縄を拾い、ぶらりと提げ、じりじりと寄る。その縄、ぶるぶると動く。)

夫人 ああれ。(と退る。)

人形使 (ニヤリと笑う。)

夫人 ああ蛇かと思つた。——もう蛇でも構わない。どうするの——どうするのよ。

人形使 (ものいわず、皺手をさしのべて、ただ招く。招きつつ、あとじさりに次第に樹

立に入る。）

夫人 どうするのさ。どうするのよ。（おなじく次第に、かくて樹立に隠る。）

舞台しばらく空し。白き家鴨あひる、五羽ばかり、一列に出でて田の草の間を漁るあさ。行春ゆくはる

の景かげを象徴するものごとし。

馬士 （樹立より、馬を曳ひいて、あとを振向きつつ出づ。馬の背に米こめ俵だわら二俵。奉納。

白米。南無大師遍照金剛の札を立つ）ああ気味の悪い。真昼間まつびるま何事だんべい。いや、

はあ、こげえな時、米が砂利になるではねえか。（眉毛に唾つばしつつ俵を探りて米を噛かむ）

まず無事だ。（太鼓の音近く聞ゆ）——弘法様のお庇かげだんべい。ああ気味の悪い——い

ずれ魔ものだ、ああ恐おっかね怖え。

——廻る——

## 第二場

場面。——一方やや高き丘、花菜の畑と、二三尺なる青麦あおむぎ畠はたけと相あい連つらなる。丘のへりに山吹の花咲揃そろえり。下は一面、山やま懐ふところに深く崩れ込みたる窪地くぼちにて、草原くさはら。

苗樹ばかりの桑の、薄く芽ぐみたるが篠に似て参差たり。

一方は雑木山、とりわけ、かしの大樹、高きと低き一一幹、葉は黒きまで枝とともに茂りて、黒雲の渦のごとく、かくて花菜の空の明るきに対す。

花道をかけて一条、皆、丘と丘との間の細道の趣なり。遠景一帯、伊豆の連山。

画家（一人、丘の上なる岨に咲ける山吹と、畠の菜の花の間高き処に、静にポケツト・ウイスキーを傾けつつあり。——驚遠く音を入れる。二三度鶏の声。遠音に河鹿鳴く。しばらくして、立ちて、いささかもに驚ける状す。なお窺うよしして、花と葉の茂に隠る。）

夫人（傘を片手に、片手に縄尻を控えて——登場。）

人形使（猿轡のまま蝙蝠傘を横に、縦に十文字に人形を背負い、うしろ手に人形の竹を持ちたる手を、その縄にて縛められつつ出づ。肩を落し、首を垂れ、屠所に赴くもののごとし。しかも酔える足どり、よたよたとして先に立ち、山懐の深く窪み入りたる小暗き方に入り来り、さて両腕を解けば繩落つ。実はいましめたるにあらず、手にてしかく装いたるなり。人形を桑の一木に立掛け、跪いて拝む。かくてやや離れたる処にて、口の手拭を解く）御新造様。そりや、約束の通り遣つて下せえ。（足手を硬直し、

突伸べ、ぐにやぐにやと真俯向けに草に俯す。(まうつむ)

夫人 ほんとうなの、爺さん。(おじ)

人形使 やあ、嘘にこんな真似が出来るもので。それ、遣附けて下せえまし。(やつ)

夫人 ほんとうに打つの？(ぶ)

人形使 血の出るまで打つて下せえ。息の止るまでもお願えだよ。(とま)

夫人 ほんとうかい、ほんとうに打つのかね。

人形使 何とももう堪らねえ、待兼ねますだ。(たま)

夫人 ……あとで強情られたつて、それまでの事だわね。——では、約束をしたものだから、ほんとうに打つてよ。我慢をおし。(ねだ)

ら、ほんとうに打つてよ。我慢をおし。(雨傘にて三つ四つ。と続けさまに五つ六つ。)

人形使 堪えねえ、ちつとも堪えねえ。(こた)

夫人 (鞭打ちつつ) これでは——これでは——(むち)

人形使 駄目だねえ。(寝ながら捻向く) これでもか、これでもか、と遣つて下せえ。(ねじむ)

夫人 これでも、あの、これでも。

人形使 そんな事では、から駄目だ。待たつせえまし。(布子の袖なし、よごれくさりし)

印半纏 とともに脱ぎ、瘦せたる皺膚を露出す。よろりと立って樹にその身をうし(しるしばんてん)

ろむきに張りつく。振向きて眼を睜りながら（傘を引破いて、骨と柄になせえまし。それでは、婆娑々々するばかりで、ちつとも肉へ応えねえだ。

夫人 （ため息とともに）ああ。

人形使 それでだの、打つものを、この酔払いの乞食爺だと思つては、ちつとも力が入らねえだ。——御新造様が、おのれと思う、憎いものが世にあるべい。姑か、舅か、小姑か、他人か、縁者、友だちか。何でも構う事はねえだの。

夫人 ああ。

人形使 その憎い奴を打つと思つて、思うさま引払くだ。可いか、可いかの。

夫人 ああ。

人形使 それ、確りさつせえ。

夫人 ああ。あいよ。（興奮しつつ、びりびりと傘を破く。ために、疵つき、指さき腕な

ど血汐浸む——取直す）——畜生——畜生——畜生——畜生——

人形使 ううむ、（幽に呻く）ううむ、そうだ、そこだ。ちつと、へい、応えるぞ。ううむ、そうだ。まだだまだだ。

夫人 これでもかい。これでもかい、畜生。

人形使 そ、そんな、尻べたや、土性骨ばかりでは埒明かねえ、頭も耳も構わずと打叩くんだ。

夫人 畜生、畜生、畜生。（自分を制せず、魔に魅入られたるものごとく、踊りかかり、飛び上り、髪乱れ、色あおぎむ。打って打って打ちのめしつつ、息を切る）ああ、切ない、苦しい。苦しい、切ない。

人形使 ううむ堪らねえ、苦しいが、可い塩梅だ。堪らねえ、いい気味だ。

画家 （土手を伝わって窪地に下りる。騒がず、しかし急ぎ寄り、遮り止む）貴女、——奥さん。

夫人 あら、先生。（瞳を睜くとともに、小腕しびれ、足なえて、崩るるごとく腰を落とし、半ば失心す。）

画家 （肩を抱く）ウイスキーです——清涼剤に——一体、これはどうした事です。

人形使 （びくりびくりと蠢く。）

画家 （且つこれを見つつ）どうした事情だか知りません。けれども、余り極端な事をし  
ては不可い。

夫人 （吻と息して）私、どうしたんでございましょう、人間界にあるまじき、浅ましい

事をお目に掛けて、私どうしたら可いでしょうねえ。(ヒステリックに泣く。)

画家 (止むことを得ず、手をさすり脊筋を撫づ) 気をお鎮めなさい。

人形使 (血だらけの膚を、半纏にて巻き、喘ぎつつ草に手をつく) はい、……これは、えええ旦那様でござりますか、はい。

画家 この奥さんの……別に、何とゆうではないが、ちよつと知合だ。

人形使 はい、そのお知合の旦那様に、爺から申上げます。はい、ええ、くだい事は、お聞きづろうござりますで。……早い処が、はい、この八ツ目鰻の生干を見たような、ぬらりと黒い、乾からびた老耄も、若い時が一度ござりまして、その頃に、はい、大い罪障を造つたでござります。女子の事でござりましての。はい、ものに譬えようもござりませぬ。欄間にござる天女を、蛇が捲いたような、いや、奥庭の池の鯉を、蝶蠨が食い破りましたそうな儀で。……生命も血も吸いました。——一旦夢がさめますと、その罪の可恐さ。身の置所もござりませぬで。……消えるまで、失せるまでと、雨露に命を打たせておりますうちに——四国遍路で逢いました廻国の御出家——弘法様かと存ぜられます——御坊様から、不思議に譲られたでござります。竹操りのこの人形も、美しい御婦人でござりますで、爺が、この酒を喰います節も、さぞはや可厭であろうと

思いますで、遠くへお離し申しておきます。担いで帰ります節も、酒臭い息が掛ろうかと、口に手拭を嚙みます仕誼で。……美しいお女中様は、爺の目に、神も同然におがまれます。それにつけても、はい、昔の罪が思われます。せめて、朝に晩に、この身体を折檻されて、拷問苛責の苦を受けましたら、何ほどの罪滅しになりましよう、それも、はい、後の世の地獄は恐れませぬ。現世の心の苦しみが堪えられませぬで、不断常住、その事ばかり望んではおりますが、木賃宿の同宿や、堂宮の縁下に共臥りをします、婆々媽々ならいつでも打ちも蹴りもしてくれましようが、それでは念が届きませぬ。はて乞食が不心得したために、お生命までも、おうしなひにならつせえましたのは、美しいお方でござりましたもの。やっぱり、美しいお方の苛責のうちでは、血にも肉にも、ちつとも響かぬでござります。——またこの希望が、幽霊や怨念の、念願と同じ事でござりましての、この面一つを出したばかりで大概の方は遁げますで。……よくよくの名僧智識か、豪傑な御仁でない、聞いてさえ下さりませぬ。——この老耄が生まれまして、六十九年、この願望を起しましてから、四十一年目の今月今日。——たった今、その美しい奥方様が、通りがかりの乞食を呼んで、願掛は一つ、一ヶ条何なりとも叶えてやろうとおっしゃります。——未熟なれども、家業がら、

仏も出せば鬼も出す、魔ものを使う顔かんしよく色いろで、威おどしてはみましたが、この幽霊にも怨念にも、恐れなされませぬお覚悟を見抜きまして、さらば、お叶え下されまし、とかねての念願を申出でまして、磔はりつけ柱しらの罪人が引廻しの状さまをさせて頂き、路傍みちばたながらかくればしよ隠場所いしょの、この山崩れの窪溜くぼたまりへ参りまして、お難ありがた有い責折檻せめせつかん、苛責かしやくを頂いた儀でござります。……旦那様。

——もし、お美しい奥方様、おありがとうござります。おありがとうござります。

夫人（はじめて平静に）お前さん、痛みはしないかい。

人形使 何の貴女様、この疼痛いたみは、酔った顔をそよりそよりと春風に吹かれますも、観音様に柳の枝から甘露を含めて頂きますも、同じ嬉しきでござります。……はたで見ます唯今の、美女でもって夜叉羅刹やしらせつのような奥方様のお姿は、老耄おいほれの目には天人、女神をそのままに、尊く美しく拜まれました。はい、この疼痛のござりますうちだけは、骨も筋も柔かに、血も二十代はたちに若返って、楽しく、嬉しく、日を送るでござりますよう。

画家（且つ傾き、且つ聞きつつ、冷静に金口煙草きんぐちたばこを燻くゆらす）お爺さん、煙草を飲むかね。

人形使 いやもう、酒が、あか桶の水おけなれば、煙草は、亡者の線香でござります。

画家 喫くみたまえ。(真珠の飾かざりのついたる小箱のまま、衝つと出いだす。)

人形使 はッこれは——弘法様の独とっこ鉗くわんのように輝きらきます。勿もつ体たいない。(這はい出して、画家

の金口から吸すいつける)罰ばちの当あつた——勿もつ体たいない。この紫の雲にのりまして、ふわふわと……極楽ごくらくの空へ舞まいましょう。

夫人 爺おじさん、もう行くの。……打ぶたれたばかりで、ほんとに可いいのかい。

人形使 たとい桂かつらがわ川がわが逆さかに流ながれましても、これに嘘うそはござりませぬ。

夫人 何か私わたしに望のぞんでおくれ。どうも私は氣きが濟とまない。

人形使 この上の望のぞみと申ませば、まだ一度も、もう三度も、御折檻ごちやうちやく、御打擲ごちやうちやくを願ねがいたい

ばかりでござります。

夫人 そして、それから。

人形使 はあ、その上の願ねがいと申ませば、この身体からだが粉こな々ずになりますまで、朝あに晩ばんに、毎日毎夜、お美しい奥方おくさま様の折檻せつがんを受けたいばかりでござります。——はや酔よも覺さめました。

もう世迷言よまいごとも申ましますまい。——昼ひるは遠慮えんりょがござりますが、真夜中まよなは、狸か、獺わうそ、化まも

のも同然どうぜんに、とがめ人てのござりませぬ、独とっこ鉗くわんの湯ゆへ浸ひります嬉うれしさに、たつ野のの木賃きに巢ねをくつて、しばらくこの山道やまみちを修善寺しゆぜんじへ通といました。——今日けふかぎり下田街道しもたがみちをどこ

へなと流れます。雲と水と申したけれど、天の川と溝どぶの流れと分れましたは、もはやお姿は影も映りませんまい。お二方様とも、万代お栄えなされまし。——静御前様、へいへいお供をいたします。

夫人 お待ちなさい、爺おじさん。（決意を示し、衣紋えもんを正す）私がお前と、その溝川みぞがわへ流れ込んで、十年も百年も、お前のその朝晩の望みを叶えて上げましょう。

人形使 ややや。（声に出さず、顔色のみ。）

夫人 先生、——私は家出をいたしました。余所よその家内でございます。連戻されるほどでしたら、どこの隅にも入れましようが、このままでは身の置おきどころ処ところがありません。——溝川に死おちた鯉こいの、あの浅ましさを見ますにつけ、死んだ身体からだの醜みにくさは、こうなるものと存じましても、やつぱり毒を飲むか、身を投げるか、自殺を覚悟していました。ただお煩うるささの余りでも、「こんな姿になるだけは、堅く止める。」と、おっしゃいました。……あの先刻さしきのお一言ひとことで、私は死ぬのだけは止やめましてございます。

先生、——私は、唯今では、名ばかりの貧乏華族、小糸川の家内でございますが。

画家 ああ子爵でおいでなさる。

夫人 何ですか、もう……——あの、貴方、……前ぜんは、貴方が、西洋からお帰り時分、よ

く、お夥間なかもまと御鼻屑ごひいきを遊ばして、いらしつて下さいました、日本橋の……（うつとりと更に画家の顔を見る）——お忘れてございますか、お料理の、ゆかりの娘の、縫ぬいですわ。画家 ああ、そうですね。お縫さん……お妹さんの方ですね。綺麗なお嬢さんがおいでなさるといふ事を、時々風説ふうわさに聞きました。

夫人 （はかなそうに）ええ、先生は、寒い時寒い、と言うほど以上には、お耳には留まらなかつたでございましょう。私は貴方に見られますのが恥かしくつて、貴方のお座敷ばかりは、お敷居越にも伺つた事はありませんが、蔭ではお座敷においで遊ばす時の、先生のお言葉は、一つとして聞き洩もらした事はないくらいでございませう。奥座敷にお見えの時は、天井の上に俯向けになつて聞きます。裏座敷においでの際は、小庭を中に、湯どのに入つて、衣服きものを着てばかりはいられませんから、裸体はだかで壁に附着くつきました。そのほか、小座敷でも広室ひろまでも、我家の暗やみをかくれしのぶ身体からだはまるで鼠ねずみのようで、心は貴方の光のまわりに蛾ひとりむしのようでした。ですが、苦勞人の女中にも、わけ知しりの姉たちにも、けぶりにも悟られた事はありません。身ぶり素ぶりに出さないのが、ほんとの我が身体で、口へ出して言えないのが、真実の心ですわ。ただ恥かしいのが恋ですよ。——ですがもうその時分から、ヒステリーではないのかしら、少し気が変だと言われました。：

…貴方、お察し下さいまし。…私は全く気が変になりました。貴方が御結婚を遊ばして、あとまる一年、ただ湧くものは涙ばかり、うるさく伸びるものは髪ばかり。座敷牢ではありませんが、附添たちの看護の中に、藻抜のように寝ていました。死にもしないで、じれつたい。…消えもしないで、浅ましい、死なずに生きていたんですよ。

——我が身に返りました時、年紀も二十を三つ越す。広い家を一杯に我儘をさして可愛がつてくれました母親が亡くなりました。盲目の愛がなくなりまして、明い世間が暗くなります。いままで我ママが過ぎましたので、その上の我がママは出来ない義理になりました。それでも、まだ我がママで——兄弟たちや、親類が、確な商人、もの堅い勤人と、見立ててくれました縁談を断つて、唯今の家へ参りました。

姑が一人、小姑が、出戻と二人、女です——夫に事うる道も、第一、家風だ、と言つて、水も私が、郊外の住居ですから、釣瓶から汲まされます。野菜も切ります。

…夜はお姑のおともをして、風呂敷でお惣菜の買ものにも出ますんです。——それを厭うものですか。——日本橋の実家からは毎日のおやつと晩だけの御馳走は、重箱と盤台で、その日その日に、男衆が遠くを自転車で運ぶんです。が、さし身の角が寝たと言つては、料理番をけなしつけ、玉子焼の形が崩れたと言つては、客の食べ余を無礼

だと、お姑に、重箱を足蹴あしげにされた事もありません。はじめは、我身の不束ふつつかばかりと、怨めうらしいも、口惜くちおしいも、ただ謹つつしんでいましたが、一年二年と経ちますうちに、よくその心が解りました。——夫をはじめ、——私の身につきました、……実家さとで預ります財産に、目をつけているのです。いまは月々のその利分で、……そう申してはいかがですが、内中の台所だけは持つておるのでございますけれど、その位では不足なのです。——それ姪めいが見合をする、従妹いとこが嫁に行くと言つて、私の曠着すれぎ、櫛笄くしがいは、そのたびに無くなりません。盆くれのつかいもの、お交際つきあいの義理ごとに、友禅も白地も、羽二重、縮緬ちりめん、反ものは残らず払われます。実家さとへは黙つておりますけれど、箆筒たんすも大抵空からなんです。——…………それで主人は、詩をつくり、歌を読み、脚本などを書いて投書をす

るのが仕事です。

画家 それは弱りましたな。けれど、末のお見込はありましよう。

夫人 いいえ、その末の見込が、私が財産を持込みませんと、いびり出されるばかりなんです。咳せきをしたと言いてはひそひそ、頭を痛がると言つては、ひそひそ。姑たちが額を集め、芝居や、活動によくある筋の、あの肺病だから家のためにはかえられない、という相談をするのです。——夫はただ「辛抱を、辛抱を。」と言うんですが、その辛抱をし

きれないうち、私は死しんでしまいました。ついこの間もかぜを引いて三日寝ました。水をのみに行きゆます廊下で、「今度などが汐しおとぎ時じや。……養生うちと言って実家へ帰したら。」「姑たちが話すのを、ふいに痛い胸に聞いたのです。

画家 それは薄情だ。

夫人 薄情ぐらいで済むものですか。——私は口惜くやしさにかぜが抜けて、あらためて夫に言ったんです。「喧嘩さわとをしても実家から財産を持つて来ます。そのかわりただ一度で可ようござんす。お姑さんを貴方の手で、せめて部屋の外へ突出して、一人の小姑の髻たぶさを掴つかんで、一人の小姑の横ぞつぼうを、ぴしやりと一つお打ちなさい。」と……

人形使 (じりじり乗出す) そこだそこだ、その事だ。

画家 ははは、痛快ですな。しかし穩おたやかでない。

夫人 (激怒したるが、忘れたように微笑ほほえむ) 穩おたやかではありませんか。

画家 まず。……そこで。

夫人 きさまは鬼だ、と夫が申すと、いきなり私が、座敷の外へ突飛ばされ、倒れる処を髻をつかまれ、横ぞつぼうを打たれました。——その晩——昨晚——その晩の、夜はかえって目につきますから、昨日家出をしたんです。先生……金魚か、植木鉢の草になつ

て、おとなしくしていれば、実家さとでも、親類でも、身一つは引取ってくれましょう。私  
は意地いぢです、それは厭いやです。……この上は死ぬほかには、行き処のない身体からだを、その行  
きどころを見着みけました。（決然として向直る）このおじさんと一所に行きます。――  
この人は、婦人おんなを虐しいげた罪を知しつて、朝に晩に答しもとの折檻せつかんを受けたいのです。一つは世  
界の女にかわつて、私わががその怨うらみを晴はららしましょう。――この人は、静御前の人形を、う  
つくしい人を礼拝らいはいします。私は女に生なれました、ほこりと果報を、この人によつて享うけ  
ましょう。――この人は、死んだ鯉こいの醜みにくい死骸しかいを拾ひろいました。……私は弱よわい身体からだの行倒  
れになつた肉を、この人に拾ひろわれたいと存ぞんじます。

画家 （あるいは領うなずき、また打傾うたかき、やや沈思しんしす）奥おくさん、更あらためて、お縫ぬいさん。

夫人 （うれしそうに、あどけなく笑わらう）はあい。

画家 貴女あなたのそのお覚悟かくごは、他ほかにかえようはないのですか。

夫人 はい、このまま、貴方あなた、先生せんせいが手をひいて、旅館りやうかんへお帰り下くださる外ほかには――  
人形使にんぎょうつかい そうだ、そうだ、その事ことだ。

画家 （再び沈黙しんもくす。）

夫人 （すり寄よる）先生せんせい。

画家 貴女、それは御病気だ。病気です。けれども私は医師いしやでない、断言は出来ません。

—— 貴女のお覚悟はよくありません。しかし、私は人間の道について、よく解わかっておりません。何ともお教えは申されません。それから私が手を取る事です。是非善悪は、さて置いて、それは今、私に決心が着きかねます。卑ひきよう怯ひきように回避するのではありません。私は自分の仕事が忙しい。いま分別をしている余裕が、——人間の小さいために、お恥かしいが出来ないので。しかし一月、半月、しばらくお待ち下さるなら、その間に、また、覚悟をしてみましよう。

夫人 先生、私は一晩かくれますにさえ、顔も形も変えています。運命は迫っています。

画家 ごもつともです。——（顔を凝視じつしさるるに堪えざるものごとく、目を人形使にんぎょうしに返す）爺じいさん、きつとお供をするかね。

人形使 犬になつて——

凝じつと夫人を抱き起し、その腰の下へ四這よつぱいに入る背に、夫人おのずから腰を掛けつ、なお倒れんとする手を、画家たすけ支う。

馬になつてお供をするだよ。

画家 奥さん、——何事も御随意に。

夫人 貴方、そのお持ち遊ばすお酒を下さい。——そして媒妁人をして下さい。

画家 (無言にて、罎びんを授け、且つ酌する。)

夫人 (ウイスキーを一ひと煽あおりに、吻ほっと息おす) 爺おじさん、肴さかなをなさいよ。

人形使 口上まが擬いに、はい小謡こつたいの真似まがでもやりますか。

夫人 いいえ、その腐くつた鯉いを、ここへお出しな。

人形使 や。

夫人 お出しなね。刃やいばものはないの。

人形使 野道、山道、野宿よじゆくだで、犬おどしは持つとりますだ。(腹はらがけのどんぶりより、

錆さびびたるナイフを抽出ぬきだす。)

画家 ああ、奥おくさん。

夫人 この人と一所いっしょに行くのです。——このくらいなものを食べられなくては。……

人形使 やあ、面白い。俺おれも食たうべい。

画家 (衝つと立ちたちて面おもてを背そむく。)

——南無大師遍照金剛。——南無大師遍照金剛——遠とほくに多おほ人数にんずの人声こゑ。童男どうなん童女どうにょ

の稚児わらわ二人ふたりのみままず練ねりつつつ出でづ——

稚児一（いたいけに）南無大師遍照金剛。……

稚児二（なおいたいけに）南無大師遍照金剛。……

はじめ二人。紫の切きれのさげ髪と、白丈長しろたけながの稚鬘ちごまげにて、静しずかにねりいで、やがて人形使、夫人、画家たちを怪あやしむがごとく、ばたばたと駈かけ抜けて、花道の中ばに急ぐ。

画家と夫人と二人、言い合せたるごとく、ひとしくおなじ向きに立つ。人形使もまた真似るがごとく、ひとしくともに手まねき、ひとしくともにさしまねく、この光景怪しく凄すこし。妖気ようきおのずから場じょうに充みつ。稚児二人引戻さる。

画家 いい児こだ。ちよつと頼まれておくれ。

夫人 可愛い、お稚児さんね。

画家 （外套を脱ぎ、草に敷く）奥さん、爺さんと並んでお敷きなさい。

夫人 まあ、勿体ない。

画家 いや、その位な事は何でもありません。が貴女の病気で、私も病気になったかも知れません。——さあ、二人でお酌をしてあげておくれ。

夫人、人形使と並び坐す。稚児二人あたかも鬼えきに役えきせらるるもののごとく、かわるがわる酌をす。静寂、雲くらし。鶯うぐいすはせわしく鳴く。笙しょう筆ひつ築ちか幽かすかに聞ゆ。——南無大師

遍照金剛——次第に声近づき、やがて村の老若男女十四五人、くりかえし唱えつつ来る。

村の人一 ええ、まあ、御身たちやあ何をしとるだ。

村の人二 大師様のおつかい姫だ思うで、わざと遠く離れてるだに。

村の人三 うしろから拜んで歩行くだに——いたずらをしてはなんねえ。

村の人四五六 (口々に) 来うよ来うよ。(こんどは稚児を真中に) 南無大師遍照金剛、

……(かくて、幕に入る。)

夫人 (外套をとり、塵を払い、画家にきせかく) ただ一度ありましたわね——お覚はあ

りますまい。酔っていらしって、手をお添えになりました。この手に——もう一度、今

生んじょうの思出に、もう一度。本望です。(草に手をつく) 貴方、おなごり惜しゅう存じ

ます。

画家 私こそ。(喟然とする。)

夫人 爺さん、さあ、行こう。

人形使 ええ、ええ。さようなら旦那様。

夫人 行こうよ。

二人行きかかる。本雨。

画家　（つかつかと出で、雨傘を開き、二人にさしかく）お持ちなさい。

夫人　貴方は。

画家　雨ぐらいは何の障さわりもありません。

夫人　お志頂戴します。（傘を取る時）ええ、こんなじや。

激はだししく跣足はだしになり、片褌かたづまを引上ぐ、緋ひの紋縮緬もんぢりめんの長襦袢ながじゆばん艶絶えんぜつなり。爺おやじの手をぐいと曳ひく。

人形使　（よたよたとなつて続きつつ）南無大師遍照金剛。

夫人　（花道の半ばにして振かえる）先生。

画家　（やや、あとに続き見送る。）

夫人　世間へ、よろしく。……さようなら、……

画家　御機嫌よう。

夫人　（人形使の皺手しわでを、脇わきに搔か込こむばかりにして、先に、番傘をかぎして、揚幕へ。――  
――）

画家　（佇たみ立たつ。――間。――人形使の声揚幕の内より響く。）

——南無大師遍照金剛——

夫人の声も、またきこゆ。

——南無大師遍照金剛——

画家 うむ、魔界かな、これは、はてな、夢か、いや現実だ。——（夫人の駒下駄を視<sup>み</sup>る）

ええ、おれの身も、おれの名も棄てようか。（夫人の駒下駄を手にす。苦悶<sup>くもん</sup>の色を顕<sup>あらわ</sup>し

つつ）いや、仕事がある。（その駒下駄を投棄<sup>つ</sup>つ。）

雨の音留<sup>や</sup>む。

福地山修禅寺の暮六ツの鐘、鳴る。

——幕——

大正十二（一九二三）年六月

## 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 山吹 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>